国際シンポジウム／ワークショップ

閉会挨拶

ムハンマド・ディルハムシャー　シアクアラ大学津波防災研究センター長

Muhammad Dirhamsyah (Direktur, TDMRC, Universitas Syiah Kuala)

私たちは4日前にエルメスパレス・ホテルでこのシンポジウム・ワークショップを開始しました。その翌日にはアチェ津波博物館、そしてその翌日はシアクアラ大学兵庫県記念棟へと会場を移してワークショップを開催し、今日はここ津波防災研究センターに集まっています。

この間、私たち津波防災研究センターと京都大学地域研究統合情報センターは、学術交流・協力のための合意文書を交わしました。アチェ（Aceh）の名は、アラブ（Arab）、中国（Cina）、ヨーロッパ（Eropah）、そしてインド（Hindia）という4つの文明から一文字ずつとった名であり、アチェは世界の文明が交わる地であるという話があります。しかし、かつてアチェはAtjehと綴られていました。アラブ（Arab）、中華（Tionghoa）、ヨーロッパ（Eropah）、インド（Hindia）のあいだに日本（Jepang）があるのです。日本が橋渡し役となり、世界のさまざまな文明がここアチェの地で交わったということです。私たちと日本とは古くから交流があり、さまざまな連携・協力をしてきた歴史があります。私たちがともに取り組んでいる本ワークショップ／シンポジウムのような創造的な活動も、そのような交流の歴史の上にあると言えます。

現場での実践を得意とする私たちが苦手とすることの一つは書くことです。けれども、書くことは重要です。書くことで記録が残され、歴史がつくられます。今日ムナスリさんがお話しした地震や地殻の話も、書くことで蓄積された研究の成果です。私たちは大事な情報を頭の中にしまいこんでいてはいけません。将来の世代に伝えなければなりません。今日会場にたくさんお越しのお子さんのいるお母さんや学校の先生たちは、情報を広める鍵となる存在です。どのようにして次世代に情報を伝えることができるのかを考えなければなりません。

私たち大学人が行っている研究は、そのままでは一般の人々に理解してもらえるとは限りません。かといって、研究内容を多くの人にわかってもらえるようなシンプルな言葉に翻訳することは、けっして簡単なことではありません。わかりあうためには、ともに座り、ともに時間を過ごすことが大切です。今日、会場にいらっしゃって、ともに座り、ともに時間を過ごしてくださった先生方やお母さん方に感謝します。また、たいへんな手間と暇をかけてこのシンポジウム・ワークショップに取り組んでくださった日本の京都大学地域研究統合情報センターのみなさんにも深く感謝の言葉を述べたいと思います。このような協力を得られたのは、これまで培ってきた交流のおかげだと思っています。

私たちが持っている情報を世界の多くの人々にとって役立つものとするために、時間と労力をさいて考えようではありませんか。私たちは数日前に文書館を訪れました。文書館に所属されているデータは、整備が済んでいないため、閲覧できず、したがって十分な形で活用されていませんでした。私たちの使命は、学術研究などによって得られた知見を私たちが日々の生活の中で使っている日常的な言葉に翻訳することです。最近はやりのWifiが使えるカフェでは、たくさんの若者たちがインターネット・ゲームを楽しんでいます。私たちはもっと創造的になれるはずです。Wifiを使うならば、インターネットで災害リスクを軽減するようなアニメーション・ゲームをしてもよいはずです。そうすれば、災害に関する知識を広め、将来の災害に備えるのに役立つでしょう。

知識や知見を日々の言葉に翻訳すると、多くの人が活用できるようになります。それによって、アチェの私たちの経験を世界の人々が活用できるようになることを願っています。